

9月1日（日）10：00～
日本キャリアデザイン学会 第20回研究大会
【第4部会】第3クール：ダイバーシティとキャリア



Landmark Collegeにおける 発達障害学生に特化した Student Successへの取り組み

○山本 美奈子（山形大学 准教授）
藤原 宏司（山形大学 教授）
小湊 卓夫（九州大学 准教授）

問題意識と研究概要

- **高等教育機関に入学する発達障害学生は急増**
 - 留年・退学する学生は多く、卒業率は7割弱
 - 就職率は一般学生（96%）（厚生労働省,2021）に対し、発達障害学生（36%）は、かなり低い（JASSO, 2021）
 - つまずきの要因に、大学入学後の初期適応がある

米国のLandmark College（以下LC）は、ASD、ADHD、LDの発達障害学生を対象にした大学
本研究では、LCのインタビュー調査を通し、大学入学前の準備プログラムに焦点をあて、大学への移行を円滑にする教育・支援体制を明らかにする。

本研究の定義：発達障害

- 言葉の発達の遅れ
- コミュニケーションの障害
- 対人関係・社会性の障害
- パターン化した行動、こだわり

知的な遅れ
を伴うことも
ある

自閉症

広汎性発達障害 (PDD)

アスペルガー症候群

ASD

注意欠陥多動性障害 AD/HD

- 不注意(集中できない)
- 多動・多弁(じっとしてられない)
- 衝動的に行動する(考えるよりも先に動く)

学習障害 LD

- 「読む」、「書く」、「計算する」等の能力が、全体的な知的発達に比べて極端に苦手

- 基本的に、言葉の発達の遅れはない
- コミュニケーションの障害
- 対人関係・社会性の障害
- パターン化した行動、興味・関心のかたより
- 不器用(言語発達に比べて)

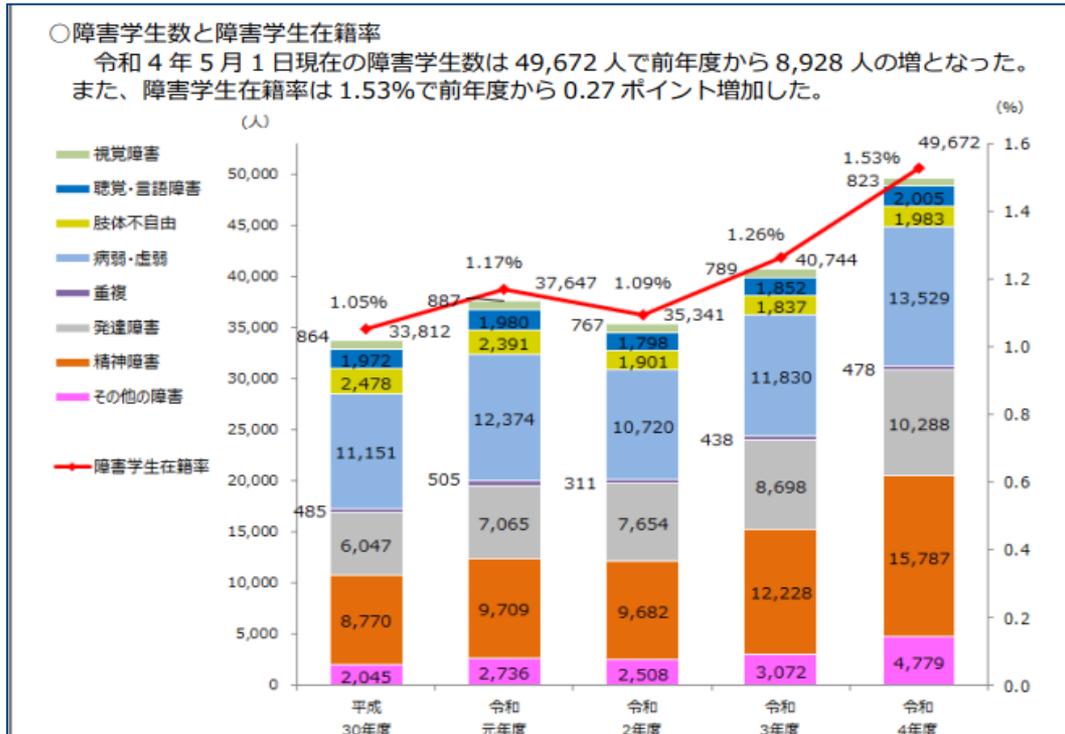
※このほか、トゥレット症候群や吃音(症)なども発達障害に含まれる。

発表内容

1. 問題意識
2. 研究目的・研究方法
3. 結果
4. 考察
5. まとめ
6. 謝辞・付記
7. 引用文献



1. 問題意識



「障害学生数と障害在籍率の推移」日本学生支援機構（2022）

- 発達障害学生の留年・退学は多く、卒業率は7割弱
- 就職率は一般学生（96%）（厚生労働省,2021）に対し、発達障害学生（36%）は、低い（JASSO, 2021）
- キャリア形成の観点からも発達障害学生向け教育、移行支援が重要

1. 問題意識

□ 発達障害学生のつまずき要因に、大学入学後の初期適応がある

- 大学生生活を漠然と捉えている、初期段階で必要な
 - ・履修管理
 - ・相談スキル
 - ・健康管理
 - ・自己理解など、認識できていない (山本・松坂・藤原,2024)



□ 日本の取り組み

- ASDの入学予定者を対象に3日間のキャンパスツアーを実施 (諏訪・稲月・望月,2020)
- 発達障害を対象に1日間の入学前オリエンテーション (大阪大学,2024)

1. 問題意識

発達障害学生の学業継続および修了 (Student Success) にむけた総合的な教育と支援の方策として、入学前の早い段階から専門的な初年次教育プログラム (FYE: First Year Experience) 開発が必要ではないか？

1. 問題意識： Landmark College

□ LC（米国Vermont州）

ASD、ADHD、LDの発達障害学生を対象とした大学

- 教職員が学業・生活面から障害特性に配慮し教育支援
- 短期大学として1985年に創設
- 2014年から4年制大学
 - ・心理学系、美術系、コンピューター系など6つの学士プログラム、5つの準学士プログラムが準備、少人数制クラス
 - ・学生数624名
 - ・ST比（教員1名当たりの学生数）は8:1
 - ・学士取得者の87%が就職・大学院に進学（2022）
- 発達障害学生の教育研究機関として、教育者向け履修証明プログラムを提供

LCの取り組みは片岡が報告（2007,2009）、既に15年以上が経過

2. 研究目的

本研究では、LCにおける発達障害学生に特化したStudent Successへの取り組みとして、大学入学前の準備プログラムに焦点をあて、大学への移行を円滑にする教育・支援体制を明らかにすることを目的にした。

2. 研究方法

□ インタビューの調査依頼をLCの公式HPから行う

- 担当者のMax McAuley氏から快諾
- 2023年8月から交渉を開始
- Zoomでのミーティングを実施
- インタビュー調査のスケジュールや日程など7回程のメールのやり取り、調査目的や要望を伝えた



2. 研究方法：インタビューの情報収集

□ インタビュー方法

- 2024年3月に筆者ら3名がLCに訪問し、実施

□ インタビュー内容

- 事前に研究目的を伝え、録音の許諾を得て実施
- 録音内容を文章に起こし、質的に分析

□ その他、情報収集

- インタビュー時の配布資料、大学案内
- LCの公式Webサイト

Vermont



3. 結果：インタビュー調査の1日のスケジュール

| 時間 | テーマ | 担当者 |
|-------|--------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 9:30 | Yamagata Delegation Presents their Project | Vice President of Enrollment Management, Director of Advising, Director of Admissions |
| 10:00 | 発達障害学生のオリエンテーションの開発 | Dean of Students and Director of Student Engagement |
| 11:00 | ASD学生のための早期オリエンテーション | Director of Social Pragmatic Programs and Support |
| 12:00 | ランチ | Landmark Collegeの学生4名、Associate Director of Admissions |
| 13:00 | 移行期のマネジメント | Director of Transition Programs |
| 14:00 | リサーチに基づく学生サービス | Vice President for Neurodiversity Research and Innovation |
| 15:00 | オリエンテーションと1年次におけるアカデミック・アドバイス | Director of Academic Advising |
| 16:00 | 全体のまとめ | Associate Director of Admissions |

3. 結果：LCの概要

□キャンパス内の寮で、新入生は2人部屋で生活

- ルームメイトと関係性を築き、社会的スキルを身に付けることが目的、ASDの学生も特別扱いをしない
- カウンセリング受診やメンタルヘルス治療の学生が多く、人間関係の躓きなど課題を抱えている

□入学前のヒアリング（学生、保護者）

- 専用のオンボーディングポータルサイトを開設
- テクノロジーサポートとしてITツールの活用方法、パソコン操作の指導など
- 生活上の困りごと、配慮してほしいことなど、個々の状況にあわせて相談対応



3. 結果：LCの大学入学前準備プログラム

秋入学（9月）の場合のスケジュール

| 月 | 項目 | 学生向け内容 | 保護者向け内容 | その他 |
|----|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 7月 | オンライン大学入学前準備 | <ul style="list-style-type: none"> ・ PEERS*プログラム（毎週：全16回） | <ul style="list-style-type: none"> ・ PEERS*プログラム（2週に1回：全8回） | <ul style="list-style-type: none"> ・ テクノロジーサポートローテクからハイテクまで指導、支援 ・ 寮のマッチング |
| 8月 | | <ul style="list-style-type: none"> ・ セルフガイドコース (薬物やアルコール教育、メンタルヘルス、性的違法行為) ・ TaC**プログラム ・ アドバイザー教員との面談 | <ul style="list-style-type: none"> ・ TaC**プログラム | |

* PEERS (Program for Education and Enrichment of Relational Skills)

** TaC (Transition at College)

3. 結果：PEERSプログラム



□ PEERS*プログラムとは

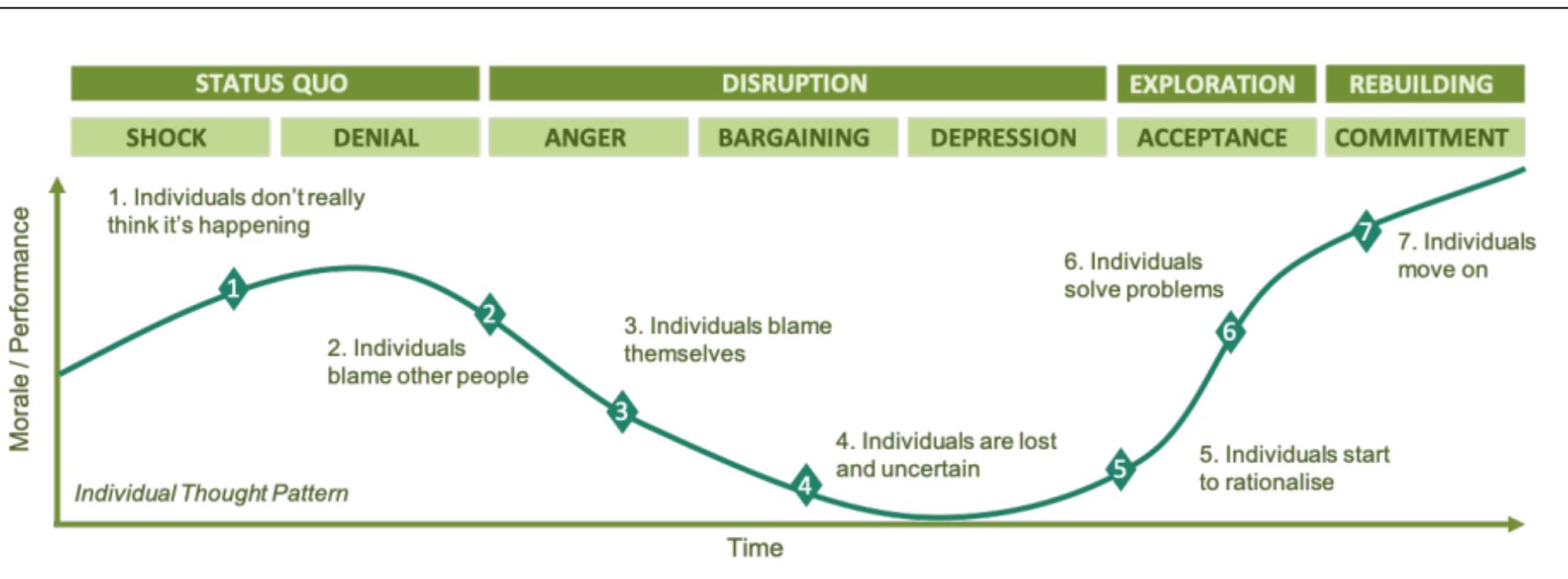
- 社会性に課題のあるASD向けの友だちづくりプログラム
- 関係スキルの教育と強化の開発 (Laugeson (2012; 2014))
- 認知行動療法理論を活用
- 保護者のサポートを基本原理、グループで取り組む

□ LCがPEERSプログラムを活用する理由

- 具体的なルールと手順があり社会的スキルを習得する仕組み、科学的根拠がある
- 入学2か月前から日常生活で活かし、練習。友達づくり・社会スキルの定着を促す
- 成功には、保護者が重要な役割を果たす

3. 結果：TaCプログラム

- 大学への移行モデルとして、悲しみの変化曲線を説明
- 悲しみ、ショック、否定、怒り、かけひき、抑うつ、受容、コミットメントからなり、転機の心の変化曲線を説明



Kubler-Ross Change Curve

3. 結果：TaCプログラム（学生向け）

□ 学生向けTac**プログラム

➤ 移行に必要な実行機能スキル開発を通し、自己効力感を高める自立モデル、LCが独自に開発

➤ 学業だけでなく生活のあらゆる場面で活用

1) 入学2か月前～1年間、TaCプログラムに参加

- ・能力開発クラス、スキル構築ワークショップ、野外旅行
- ・インターンシップ体験など

● 特性や長所、短所を知る

2) 2年目以後

- ・学内のメンター、催しものの企画係、リーダーなどの役割体験

● 社会的能力、自主性、対人関係を強化、実行機能スキル***を高める



**Tac (Transition at College)

***実行機能スキル：やり遂げる力

3. 結果：TaCプログラム（保護者向け）

□ 保護者向けTac**プログラム

- 入学2か月前～参加
- 転機と子供の自立プロセスを学ぶ
- 保護者自身が子どものために率先して問題解決することは、自分の役割ではないことを認識する
- 学生が計画を立て、大学のサポートを受け、目標達成に取り組んでいることを知り、「私が代わりにやる必要はない」と認識、見守る
- 保護者の関わりが変化、見守って貰うことが、学生自身も勇気づけられ、成功と失敗に責任を持つことができる

4. 考察

ロLCのインタビュー調査

- キャリア形成という観点から、大学入学の移行期には一般学生よりも丁寧な対応が求められている。
- 片岡（2009）の報告と比較、入学前プログラムが体系的に確立。PEERSとTaCプログラムが効果的に機能。

| | 片岡（2009）の報告 | 本インタビュー調査の結果 |
|---------|------------------------------------|--------------------------|
| 実施時期 | 入学10日前 | 入学2か月前 |
| 対象者 | 学生 | 学生および保護者 |
| プログラム内容 | キャンパスツアー、履修登録説明、アドバイザーや寮スタッフとの面談など | ・PEERSプログラム ・TaCプログラム |

4. 考察

□入学前の教育・支援体制の違い

- 日本では
 - ・学習面で困り感の強い学生に対し、合理的配慮を実施
 - ・社会的スキル訓練は一部の大学で事例報告のみ
- LCでは
 - ・入学2か月前からPEERSとTaCプログラムを通し、友だちづくりや社会的スキル、自立することを学ぶ

- ASDがあると仲間関係を築くことが苦手 (岡本ほか,2017)
- ASDのある人は、他のASDの行動パターンに共感し、相互理解が深まる (Komeda,2015)
- PEERSプログラムでは、ASDの特性を活かし参加者同士が課題を共有することで学びが深まると考えられる。

5. まとめ

本研究では、LCのインタビュー調査を通して大学入学前の準備プログラムに焦点をあて、大学への移行を円滑にする教育・支援体制を明らかにすることができた。

□ LCでの入学前の取り組み

- 発達障害学生の発達上の課題や大学移行期の課題に対して、入学2か月前から専門的な初年次教育プログラムFYEが取り組まれていた。
- LCのPEERSやTaCプログラムは、日本の発達障害学生のキャリア形成という観点からも、参考になる部分が多いことが示唆された。

6. 謝辞・付記

本研究を実施するにあたり、インタビュー調査の依頼から当日のスケジュールなどすべての調整に関わり、協力いただいたAssociate Director of AdmissionsのMax McAuley氏に深く感謝申し上げます。

本研究は、JSPS科研費23K02544の助成を受けて実施しました。

7. 引用文献

- 片岡美華 (2007)「学習障害のある学生への支援モデル: 米国ランドマーク大学の例より」『鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編』 59, pp.37-47.
- 片岡美華・玉村公二彦 (2009)「高等教育における発達障害学生への導入・初年次教育-LD・ADHD に特化したランドマーク・カレッジの場合」『奈良教育大学紀要. 人文・社会科学』, 58(1),pp. 57-67.
- 木内敬太 (2016)「成人の発達障害者のためのコーチングの可能性 高等教育と職域の架け橋として」『支援対話研究』, 3, pp.15-29.
- Komeda, H. (2015) Similarity hypothesis: Understanding of others with autism spectrum disorders by individuals with autism spectrum disorders, *Frontiers in Human Neuroscience*, 9, pp.124.
- 厚生労働省 (2021)「令和3年3月大学等卒業者の就職状況」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000184815_00016.html
- Landmark College公式HP <https://www.landmark.edu/academics>
- Laugeson, E. A., Frankel, F., Gantman, A., Dillon, A. R., & Mogil, C.(2012) Evidence-based social skills training for adolescents with autism spectrum disorders: The UCLA PEERS program. *Journal of autism and developmental disorders*, 42, pp.1025-1036.
- Laugeson, E. A. (2014) *The PEERSR curriculum for school-based professionals: Social skills training for adolescents with autism spectrum disorder*. New York: Routledge.
- 日本学生支援機構 (JASSO) (2021)「令和元年度障害のある学生の修学支援に関する実態調査」
https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/__icsFiles/afieldfile/2022/08/17/2021_houkoku_2.pdf
- 日本学生支援機構 (JASSO) (2023)「発達障害 (1) 発達障害とは」
https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/shogai_infomation/shien_guide/hattatsu_shougai.html
- 岡本百合・三宅典恵・永澤一恵 (2017)「思春期青年期の自閉症スペクトラム」『心身医学』, 57(1), pp.44-50.
- 佐藤典子 (2018)「発達障害傾向がある学生の保護者と高等教育機関との連携を考える—保護者支援の観点から—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要第』 4号,pp.329-338.
- 田所摂寿 (2016)「発達障害の子ども心理発達とキャリア教育: 青年の自立と親の子離れを考える」『作大論集』, (6), pp.107-126.
- 山下美実子・石晓玲・桂田恵美子 (2010)「大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討」『臨床教育心理学研究』 (36), pp.21-26.
- 山本美奈子・松坂暢浩・藤原宏司 (2024)「発達障害学生の成功に寄与する初年次教育プログラム開発への取り組み」『キャリアデザイン研究』 20巻,掲載決定